紙面から

こころ

伊勢　彦信さん

## メセナと経営、矛盾せず

企業の芸術文化支援が、効率を求める経営と矛盾することはない。社会への貢献活動は、仕事へのエネルギーとなり、企業の活力へ還元されるはずだから。

# 美術品収集の価値

# 伊勢彦信さんに聞く

# 「共有財産」守るパトロン

## 道楽視する日本、嘆息

**多くの人に鑑賞してもらって初めて、美術コレクションの価値が出る**

鎌倉時代の仏師、運慶の作とみられる仏像がこの三月、ニューヨークで競売にかけられ、日本美術としては史上最高額の約十三億円で落札された。コレクターの顔をのぞかせながら伊勢彦信さんがこう語る。

「プレビューでこの仏像を見ましたが、それは素晴らしいものでした。両手で印を結び、足を組んで座っており、柔和な表情から黄金の光が放たれている。見つめているだけで時間を忘れ、自分の中の疲れや汚れが洗い清められたような気持ちでした」

「競売前には、国宝級の作品の流出を防ごうと署名運動が起きていたようです。私もなんとか購入に参加できないかと考えたのですが、予想落札価格（二億円）を見ると、とても私の力の及ぶところではなかった。でも、落札されたのが日本の宗教法人で、一般にも公開されるという。何はともあれ、海外流出が防げてよかった」

二〇〇六年末、フランス政府から芸術文化勲章である「シュヴァリエ勲章」を授章。彼の所有する印象派やエコール・ド・パリの絵画コレクションを内外の美術館へ貸し出し、フランス美術の普及に貢献したことが評価されたのだ。

「要望があれば、私のコレクションは無償で貸し出すことにしています。美術品は愛好者が全員で楽しむべき共有財産だと思っているから。私が所蔵する絵画であっても、Aさんが鑑賞している時はAさんのものであり、Bさんが見ているときはBさんのものなんです。より多くの人に鑑賞してもらい、鑑賞者が感動を覚えて初めて作品の価値も出てくるのです」

**文化支援活動が、最終的に企業の活力に還元されていくと信じています**

一九八〇年代初め、規制の多い日本を飛び出し、米国へ進出。またたく間に全米一の鶏卵ビジネスを育て上げた。八三年には「イセ文化基金」を創設。

「米国へ行って、その自由で公平なビジネス土壌に感激したものです。銀行の融資や土地の取得など、ぽっと出の日本人でも何の分け隔てなく扱ってくれた。そして、社会貢献が経営者の当然の役割として認識されていることにも驚かされました。一流の仕事をしていくために、米国人経営者に負けない心意気を持ち続けたい。だから、収益の一割ぐらいは文化活動支援を通じ、社会に還元したいと腹を決めました」

ブロードウエーでビルを購入。そのフロアを一部、無名のアーティストの活動の場として提供している。

「経営は効率を求めるものだが、芸術文化を守る場合、非効率なことも覚悟しなければならない、とよく言われる。でも、芸術に癒やされるために働いていると考えれば、私は何の矛盾もなく頑張れた。コレクションを組み立てたいという思いが、自分の仕事へのエネルギーになった。また、社会への貢献活動が、ひいては自分の会社の活力に必ず還元されていくと信じていました」

しかし、日本のメセナ活動は、欧米に比べてまだまだ遅れているという。

「先だって、あるオークション会社の呼びかけで、東アジアのコレクターが集まり、香港で意見交換する催しがあった。日本からも十人ほど招待されたのに、現地へ行ったのは私一人だった。皆さん、名前が表に出るのが嫌だったのだろうか。日本社会がこうした活動をまだ認めておらず、道楽ぐらいにしか見ていないからだろうか」

「まだしも、昔の方がよかった。出光佐三さん（出光美術館）や石橋正二郎さん（ブリヂストン美術館）らが、人類の文化遺産は自分が守るという気概を持って大コレクションをつくられた。こうした芸術のパトロンを、社会も尊敬のまなざしで見ていた。ところが、バブル崩壊以降、メセナの勢いも失速したように思えてなりません」

「個人コレクションや文化支援活動への評価が低いということが、この国の芸術文化を硬直化させている面もあるのではないでしょうか。村上隆や奈良美智などの若手のアーティストは当初、日本では『漫画みたい』と見向きもされなかった。しかし、米国のオークションで火がついて逆輸入された。こんな状況は、残念と言うほかありません」

**これからはジャパン・クールに生きていきたい**

現在、彼が力を入れているのが、「ジャパン・クール」の具体化である。

「海外の多様な文化を受け入れ、清潔で倫理観や思いやりなどの美徳を持つようになった日本人の生き方が、米国雑誌で『日本的かっこよさ（ジャパン・クール）』と指摘されました。神社で結婚式をあげ、クリスマスを楽しみ、葬式は仏教で行う日本人は無定見だという意見もありますが、私はそうは思わない。あらゆるものを自分の生活様式に無理せず取り入れる、それが一番自然な人間の生き方ではないでしょうか」

「このジャパン・クールを基調にした文化活動が展開できないだろうか。手始めに、それをお茶の世界で試しています。難しい茶道の作法を取り払い、誰でも楽しめる平明なお茶会を催すのです。茶席にはフランス印象派の絵画を掛け、エミール・ガレのガラスの花瓶を置き、現代の若手工芸家のつくった茶わんで抹茶を味わう。それによって、現代と伝統を調和させ、新たな美的空間が演出できればいいと思っています」

彼はどんなに忙しくても、週末は富山県高岡市の北陸の自宅で過ごす。

「周囲には、のどかな田んぼが広がっています。部屋には気に入った美術品があるだけ。テレビも電話もないこの空間でゆったり過ごす。私にとって至福の時ですよ」

（編集委員　野村義博）

**いせ・ひこのぶ**　1929年富山県生まれ。62年イセ株式会社創業。以後イセファーム、イセ食品、イセヒヨコなど設立し、鶏卵生産、加工食品製造などを世界中で展開。イセ文化基金はイセグループのうち米国3社の寄付金で83年に創立。翌年に米国税局によって文化財団として正式に認められた。